
迷夢想記

四季 雨雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷夢想記

【Nコード】

N5016BA

【作者名】

四季 雨雪

【あらすじ】

まだ幼い一人の少女「由愛^{ゆめ}」は戦火に巻き込まれ母と壕に籠りひたすら恐怖と涙をこらえていた
しかし豪の上で爆発が起こり母を失って？一人となってしまう
由愛は気絶し意識を失う
しかし気がついた時には既にそこは元居た豪ではなくもりの中であつた

迷夢想記

幻想．．．人々が幻を思い作り上げた架空の存在。

しかし時に妖怪達ははその幻想を現に作り出し忘れ去られた妖、あやかし神々、人々の樂園を作り出した

そこは私たちの住む現実とは隔たり孤立した存在の世界

そしてその幻想郷に新たな住人がまた一人やってきたらしい

「あれっ？ここはどこ？お母さんと一緒に空襲から逃げていたのに」

一人の少女ゆめ由愛は外の世界で生きていたまだ幼さの残る少女である
しかし他国との争いに巻き込まれ母親と避難していたらしい

たしか壕の上で大きな音がして気がついたらここにいた

「お母さんはどこだろ？」

私は一緒にいたはずの母を探すためまだ幼い少女はこの幻想郷の地に、そのまだ幼い足を踏み出した。

私は死んだのだろうか？そんな疑問と恐怖が由愛を襲う

しかしここはどうみても三途の川ではない、賽の河原？河原というより森だ

肉体も、意識もはつきりしている

！？

ふと、後ろに人が居たような気配がした

「お母さん！」

私はそのまま私の後ろにいた人らしき者に抱きついた

「ふふっ、可愛いわね」

そこに居たのはお母さんではなかった

「ごっ、ごめんなさい」

顔が真っ赤になった

すごく恥ずかしい

「あら？いいのよ、私も面白いものを見せてもらったし」

そこにいたのは白い傘を肩にかけすらつとした綺麗な女の人だ

「えーと、そのおーお姉さん？誰？」

私は恐る恐る言ってみた

「私？私は八雲 紫、そうねえとっても優しいお姉さんよ」

「ゆかりさん？お母さんはどこかわかりますか？」

すると紫さんは重苦しそうな表情で空を見上げた

「そうね、今頃、着いたかしらね……」

着いた？一体なんのことだろう

「あ、あの、お母さんに会いたいのですけど……」

「こら、その前にあなたのお名前は？聞いたらというのは礼儀でしょ？」

すっかり忘れていた

「ごめんなさい、私の名前は由愛です」

それを聞くと紫さんは爽やかな笑顔で微笑んでいた

「そう、由愛ちゃんね？よかった」一体なにがよかったのだろう？
しかし助かった、誰もいないのでは心細くて泣きそうだった

「それでは私は失礼するわ、人食い妖怪に襲われないようにねーじやあね」

そう言っていると彼女の後ろに目のような大きな割れ目ができその中に消

えていった

「で、ででたあああああああああ」

思わず私は叫んでしまったまさか本当に居たとは信じられなかったお化けなどそんな存在なんて信じてはいなかったが今ははっきりとその存在を信じるしかないと言えざるおえない

うー

泣きたくなった、今は寂しさと未知への恐怖が同時に襲ってきた怖い、怖い

こんな暗く深い闇の中にいるのは私だけ、恐怖以外ない

すると月明かりに照らされて頭上に影が落た

「あやや？こんな所に人間ですか？これはいいネタの匂いがしますね」

「あゝもう文さん早すぎですよゝ」

「あつごめんなさい、ごめんなさい、つついネタの匂いがしたのでスピードを出しすぎました」

そこに居たのはカメラを片手にニコニコ笑う黒い髪の少女と白い綺麗な毛を持つ少女の姿があった

「やっぱり椀の能力は便利ですね、ネタをすぐに見つけてくれる、連れて来て正解です」

「せっかくにとりさんと将棋してたのにいゝ後で謝らないと……」

「あ、あのおゝ……私に何か用ですか？」

ネタとか言ってるしきつと私を食べに来た妖怪ではないと思う

「あやや？これは失礼しました、私は清く正しい射命丸 文と言います、是非貴方の取材をさせて欲しいのです！」

「私は犬走 椋といいます」

「は、はあ・・・」

いきなりことで頭が回らない
今分かっていることはこの二人が私を食べに来ているのではなく取材に来ていることとさっきまでの恐怖が消えたこと

「では、取材しますね」

「は、はい！」

「名前は？」

「由愛です」

「ほほお～ではなんでここにいるのです？」

「わかりません」

「なるほど、それでは・・・」

その後私は長々と質問攻めを受けた

「文さあ～ん、まだ聞くのですかあ～」

少々呆れた顔をしながらそう彼女はいった

「椀！取材はまだまだこれ方ですよ！」

「・・・・・・・・・・。」

私はもう疲れた話すことはもうすべて言っただ

「もう私一人で帰りますよ！」

椀さんはそう言って走っていった

「あっ！椀！待ってくださいよぉ～それではまた取材に来ますね！ちよっとぉ～もーみーじー」

気づいたらもう夜明けだ、お母さんのことを聞けなかったがでも寂しさが少し埋まった

「文さんと椀さんか・・・後でお礼言っておこう」
そしてまた私は歩出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5016ba/>

迷夢想記

2012年1月14日19時48分発行